

さいたま教区 宣教・福音化年  
群馬県「講話と学び合いコース」  
—自分の言葉で福音を語ろう—

岡田武夫

テーマ「神—わたしにとって神とは？」

2017年7月8日(土) 太田教会

「神—わたしにとって神とは？」というテーマをいただきましたが、何を話したらよいか、かなり困っております。皆さんの学び合いの材料、あるいは何かの足しになればよいかなと思います。

わたしたちは神を知っていますが、この神はキリスト教の神。イエス・キリストが教えてくださった神であります。イエス・キリストの教えてくださった神は、すでにイスラエルの人々が信じていた神、同じ神様です。同じ神様ですけれども、そこに信仰の発展がある。そして、イエスが地上を去るときに、わたしたち教会がつくられ、残されました。神を信じる民として、世界中に宣教しているわけであります。

神様というのはどういう方か、人間にはわからない、よくはわからないわけです。わかれば、わたしたちも神様になってしまいます。神様がわからない。わからないから、あちら側からわたしたちにご自分をお示しになる。こうだよ、ああだよと。それが長い歴史の中で少しずつ、小出しにというか、教えてくださっている。一度に教えても、とてもわからないだろう、受け入れられないだろう、ということで、何回も色んな機会に、色んな人を通してお話になったのだと思います。

わたしたちの神は信仰の神、信じている神、なんですけれども、その前に、頭で考える神様という場合があります。それは、哲学者とかいう人が頭で考えて、神様とはこうだ、ああだと考えた神です。しかし、聖書の神は頭で考えた神ではなくて、神様のほうから人間に語りかけて、御自身を示してくださった。そういう神様ですね。

それで、「神」という言葉ですが、キリシタンの時代、翻訳に困ってしまったんです。よく日本語がわからないうちに、どういう日本語で説明したらよいか、きっと悩んだのでしょう。色々やってみたようですが、良い言葉が見つからなかったので、デウスという言葉にしたらいいんです。デウスはラテン語の神ですが、他にもどういう日本語にしたらよいかわからないというので、そのままラテン語の発音を日本人が言いやすいような発音にしたというか、自然にそうやってきたんでしょうか。

当時は「神父」という言葉もなかった。「パードレ」と言いました。「神父」とか、あるいは現代で我々が使っている用語は、明治時代になって、宣教が再開された時に導入され

た言葉で、多分中国から来たんじゃないかと思われます。前のほうがよかったかもしれないですね。色々な言葉がほぼ原文というか、当時の宣教師が自分の国の言葉、あるいはラテン語の言葉を、そのまま日本人に言いやすいようにしたのであります。

神という言葉も、第二ヴァチカン公会議以前、日本では、わたしたちも以前、「天主」と言っていたわけで、昔の痛悔の祈り、“ああ天主、われ、主の限りなくきらい給う罪をもつて”というように祈っていました。・・・ともかく神ではなく、「天主」であった。

日本では、神というと、天神様の神、八百万の神といますが、誰でも神様になりえます。特別な力を持った人、そして、亡くなった人が生きているわたしたちの上に及ぼす、良い力、悪い力、そういうものを持っている存在が神なのでしょうか。

菅原道真が天神様になったでしょうけれども、政敵の藤原氏に貶められて、讒言されて、左遷されて、裏切りの中で亡くなった。その怨みが残っているので、色んな災害が起こるから、どうぞ怨みを捨ててください、お鎮まりください、とって神社を建てて、宥めるという考えだった。

色んな神様がいて、神社に行って、この神社はどういう神様が祀っているかなと思うけれども、ほとんど関心がない。でも一応聞いてみると、なんとかの命とかになっているのですけれども、わたしたちはそれくらいの神理解なのです。それなのに、なぜキリスト教の神を神と訳したのか。もう今更どうにもしょうがないのすけれども。

「神」という言葉が、わたしたちの神理解に誤解を与えているのかもしれないのです。「神、こんなに誤解された言葉はない」と言う人もいます。でも、どう誤解してるのか、わたしたちにはわからないんですね。

さて、昨日は金曜日で、ダビデの痛悔の祈りの詩編を唱えました。詩編 51 で、金曜日の晩の祈りに唱えます。ダビデでという人は最も華やかで立派な英雄である王として有名ですけれども、このダビデはとんでもない大きな過ちを犯した。そのことを聖書がちゃんと記して、伝えているわけです。人間の犯す色んな罪の中でも、セックスに関する罪。姦通とか、姦淫とか。それから人のことを憎らしく思い、そしてその人がいなければいいと思うだけじゃなく、実際にいなくしてしまうというのが殺人ですけれども。この姦淫と殺人の罪を犯した。とんでもない王様なのです。その王様はしかし、イスラエルの歴史の中では最も有名であり、尊敬されています。どうして、こういう人が聖書の中で何度も何度も登場するのか。

ダビデという人は、預言者ナタンから諫められまして、自分の綾安置を認めました。怒りのあまり、ナタンを征伐する、ということをしなかった。彼は、わたしは罪を犯しましたと認めたわけですね。そこが偉いわけです。人から自分の過ちを指摘されると、大概の人は頭にきたり、怒ったりするんですけれども、彼はその指摘を認めた。

彼は部下の妻を見て欲しくなり、盗っちゃったわけです。そして妊娠したので具合が悪いから、とにかくその夫の子どもにしようとしたのだけれども、その夫のウリヤという人

はちょうど戦争をしている時で、自分だけ家に帰って、妻と一緒に寝るわけにいかないという、軍人の鏡みみたいな立派な人だったので、それで彼をうまく殺されるように仕向けたわけです。有名な話、サムエル記の下の章、に出てきます。

ですから、誰に悪いことをしたかという、まず夫ウリヤに対して罪を犯したわけです。夫に謝って、償いをしますとか、さらにみんなが戦場で命懸けで戦っているのに、自分だけのうのうと変なことをしたので、みんなにも申し訳ないところもある、ということになります。しかし、ダビデは、“神よ、わたしはあなたに罪を犯した”とっています。わたしたちは告解するとき、神様に罪を告白します。それからミサの時に告白の祈り、毎回言いますね。“全能の神と兄弟の皆さんに告白します。わたしは思い、言葉、行い、怠りによって……。” そうだ、兄弟に、と言ってるんだ。しかし本当に兄弟に言ってるつもりかな。神様に言ってるか。皆さんの一人ひとりの心の内はわかりませんが、わたしなんかは、本当に神様に、ダビデのように、まず神様に罪を犯したと思ってなくて、ちょっと具合が悪いことをしたとか、あの人を怒らせてしまったとか、悪かったな、とか言うんですけども、“神様にわたしは罪を犯しました”と本当に思っているかという、うーん、自信がありません。

そう思えるように、本当にわたしは神様に対して罪を犯したんだと、それだけ神の存在が強く自分の心にあるようであればならない。ダビデはそれがあつたんですね。もちろん大罪ですけども、その大罪というのは神様に対して犯したことだということ。だから、悪いことといつても、日本の法律で罰せられるとか、あるいは逮捕されるとか、刑法とか、軽犯罪とか、色々あつたけれども、そうじゃないのが、道徳的とか、世間的にまずいとか色んなことがあるわけですけども、神様にわたしは罪を犯しましたと、いうことです。これがわたしの中にあるだろうか、とこう思うわけですね。

イスラエルの民は、バビロン捕囚という体験をしたわけで、紀元前の六世紀。バビロニアというところに強制連行されて、そこで約 70 年過ごす。その時の深刻な体験から、主なる神様への信仰が清められ、深められた。そして旧約聖書は、バビロン捕囚の体験から編集されたものではないかと言われているわけです。

伝承として神様の話は伝えられていたのだけれども、巻物に編集されたのはバビロン捕囚からそのあつらしいのです。

『教会の祈り』（わたしたちが四週間かかつて詩編を全部お祈りするようになっておりますが）で唱える詩編の祈りのなかに、“お前の神はどこにいるのか”と言われて嘲られる、という祈りがあります。

こう言っています。

本当にこたえる。お前はわたしたちのとりこになつてゐるではないか。神様はどうして、あんたたちを助けないんだ。どこで何をしているんだ、

とそう言われて、本当に骨身にこたえる。

神様、わたしは敵からこんなことを言われてるんですよと、これも神様に向かって訴えているのです。神様を信じて、神に向かって言っているわけで、神様に訴えたり、嘆いたり、そういうのも神を信じているからであって、そういう心が無ければ、神も仏もあるもんかということになるでしょうが。

どうも神様に、お前の神はどこにいるのかと言われて、わたくしは本当に参ってます、ということを神様に訴えるというのがここ詩編の祈りであるわけです。わたしたちが神への信仰というものを人に伝える時に、神様に罪を犯すという（この罪という言葉もなかなかしっくりいかないんだけど）、神様に自分が背いた、神様に赦しを願います。わたしはいつもそうしています。そうしないと心の平安が得られません。それがまあ、わたしたちの信仰ですが、わたしたちはむしろ、神様よりも人間関係、周りの人との関係でできるだけまずくならないように、あっちにも良く、こっちにも良くしようとしている部分もあります。そうして、破綻しちゃって、こっちもさっちもいなくなる。そしてその場の空気を読んで、良さそうなほうにいこうというのがだいたい行われていることなのだろうか。

でも神を信じる人は、神様がどうかということが大事なので、人がどう思うかは二の次なんですね。わたしたちは、建前ではそう言ってますけれども、本当に思い信じているだろうか。

それから悪の問題。神様はいるんだったら、どうしてこういう様々な災害、それから犯罪、この地上にどんどん増大しているような様々な悪い事柄、大量虐殺とか、貧困、環境破壊が起るのか。

2011年3月11日、東日本大震災が起こった。この時も色々な宗教で論議されたと思う。この災害というのはどうして起こるのか、その宗教の神様はこの災害をどう思うのか。神様が起こしたのか。どうして起こったのだろうか。そういうことは当然疑問になる。これはどんな宗教でも昔から出てきている問題であって、神が正しい方であり、全能な方であり、そして全ての人の幸せを望んでいる方ならば、どうしてこの地上に、この悲惨な現実があることを黙認しているのか。神様が引き越したのか。そうでないならば、どうしてそういうことがあるのか。そういうことが起こるのを神様は、どうして止めさせないのかという問題ですね。これ、わたしたちも聞かれるかもしれないですね。どう答えたらよいかなど。

昔から、これは「神義論」といいます。旧約聖書のヨブ記なんかは、そういう問題を主題にします。

それで東日本大震災が起こった直後に、日本に住んでいるエレナさんという女の子の手紙が、おばあちゃまのイタリア人を通して、教皇様のところに届いた。それが驚くまいことか、時の教皇ベネディクト十六世が取り上げたのです。それでこの子の質問は、

“わたしたち日本に住んでいる子どもは、非常に怖い目にあっている。どうしてわたしたちはこんな目に合わなければならないのか。教皇様、神様に聞いてくれませんか。”

という質問でした。それは大きくなればわかるよとか、信仰の問題だよとか言わないで、ベネディクト十六世は、

“日本に住むエレナさん、あなたのおっしゃることはよくわかります。本当にそういう疑問を持ちますね。実はわたくしにも答えられないのです。”

と正直に答えられたのですね。そういうことは何とかの本に書いてあるから読みなさいと、そういうことは言わないんですね。神様はいるのに、どうしてそういうことが起こるのかわからない、と言われました。いつかわかる時が来るかもしれないが、今はわからない。でも神様は皆さんの苦しみをご存知です。それから世界中の皆さんが、日本で起こった不幸なことについて心を痛めています、と。おおよそ、そういう返事をしたわけなんです。で、わたしの心に響いたのは、わたしにもわからないという返事です。ベネディクト十六世はラッツィンガーという大変な学者ですからね。

それでギリシャ人の考える神というのは、神は完全な存在。「不動の動者」とか言うように、動かない、変化しない。そして、あらゆるものを司っているのだから、神からすべてのものが派出する。すべてのものの原因は、最終的には神にたどり着くという。でも、神は完全なので欠けたところがないから、わからないとか、できないとかあり得ない。できないというのは、もう全能の神ではないことになる、という理論のようですが、わたくしにもそのあたりの理論はよくわかりません。

わたしたちは、本当に神というものは何であると思うのか。信仰宣言、信条、特にニケア・コンスタンチノーブル信条というのがあります、唱えます。

創造主。天と地、見えるもの、見えないもの、すべてのものの造り主である全能の父である神を信じます、とわたしたちは信仰告白するわけで、すべては神によって造られた。イエス・キリストは造られたのではなくて、生まれた。造られずして、父と一体。父と一体、これを難しいギリシャ語の概念、同一本質と訳すのか、**Consubstantialis**(コンスブスタツィアリス)という難しい言葉ですけども。そうやってギリシャ人は自分たちの用語、ソクラテスだの、プラトンだの、アリストテレスだの、偉大な哲学者を生み出した国ですので、彼らが使う難しい用語を使って、神様のことを説明しようとしている。これはわたしたち日本人にはちょっと、というか、かなり難しいというか、言われてもそうなのかな、そう言われればそうなのかな、そうならそれでいいけどみたいな感じになるんですけれども。もちろん全能という言葉は、聖書にはあることはあるが、どういう意味になるのだろうか。

創世記、旧約聖書の最初の巻物ですけども（ちなみに旧約聖書の中で創世記が一番最初に書かれた書ではないわけですね。のバビロン捕囚の後なのかな、わかりませんが。）

ものすごい悲惨は現実の中で、神様が、この世界を造った、神様の造った世界は、善い、という信仰を告白している。最後に、六日目に創造の仕事を休まれて、ご自分の造られたものをご覧になって、極めて良かった、とこう書いてあるのですね。どうしてこの世界は

極めて良いのかと、これは根本的な疑問なんですね。わたしたちが聞かれた時に、どう説明できるでしょうかね。どうしてこんな殺人や様々な犯罪が起こる、同じ神を信じているはずのキリスト教徒、イスラム教徒があちこちで殺し合いをしてるし、日本人も巻き添えになって、IS とか、ああいう勢力になんか処刑されて、インターネットで世界中に出回るという信じられないような、それが神を信じている人がやることかというように思うわけなんです。

神が存在するとはどういうことか。アブラハムに現れた神。旧約聖書で、アブラハムという人は非常に重要な存在で、三つの一神教、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教が共通に尊敬している人物なんですけれども。旧約聖書で、もしかして一番重要な人物は、モーセという人ですけれども、このモーセに現れた神は、モーセが“あなたのことを他の人にどう話したらいいか、あなたの名前は何ですか”と訊いたら、“わたしはある。”というもの。“わたしはある”が名前だという、わかったような、わからないような、名前。これも学者が難しく説明してるんです。“ある”ということは、ここにただ物体があるように在るのではなく、神は、この世界の現実を把握し、すべてを承知でこの世界を動かし、かつ世界を神のみこころに従って造る働き、それを創造を行っている、というわけですね。ですから、聖書の色んな箇所に、ああ神様がおられたとか、神が働いてくださったとか、信仰告白するところがありますけれども、本当に皆さん信者になられた時に神様いるんだと。神様は私にこうしてくれたとか、こういう時にわたしは神様を感じたとか、あるいは具体的に誰かを通して神様が働いてくれたとか、神は霊ですから見えませんが、神の働きは色んな人を通して伝わるわけですから、本当に神はいらっしゃるんだという体験をお持ちなので、その体験を他の人に自分の言葉でお話になると、その人は難しい本は読んでも仕方ないけど、現に今ここにいる人がその神に支えられ、神に救われるという体験をしている、そう言ってるんだから神様いるのかなとか、わたしももっと神様知りたいと思ってくれるのではないだろうかと思うわけです。

それでモーセに働いた神は、エジプトで奴隷の状態に落とされ、苦しめられていたイスラエルの民を解放するために、モーセを派遣した。そしてシナイ山で、神の掟、それは十の掟にまとめられるんですけれども、十戒を授けた。しかし、イスラエルの民はこの神様のみこころに背いて、神様の掟を蔑ろにする。何度も何度も、神を裏切る。神のみこころに背くことを繰り返すというのが、イスラエルの民の歴史であります。その結果、聖書ではだんだん神様というのは、人々の背きに対して怒りを発し、そして罰する神であるという理解がだんだん深まって行って、神の怒りという考えが強かったようでありまして、エゼキエルの預言などでは、もう神はカンカンに怒りくるっているというようなことが出てくるわけですね。例えば7章の4節などで、

「わたしは、お前に慈しみの目を注がず／憐みをかけることもしない。お前の行いをわたしは報いる。お前の忌まわしいことはお前の中にとどまる。そのとき、お前たちは／わたしが主であることを知るようになる。」

なんだこれ、ざまあみろみたいな感じで、もうこれだけ言っても聞かないんだから、あとはどんな目にあっても知らないぞというような感じで、神は怒りを民に告げる。それで首尾一貫して、イスラエルを罰するののかというと、そうでもない。代表的な箇所。神がイスラエルをこう憐れむという言葉が、預言者を通して伝えられるんですね。ホセアという預言者ですけれども。

「ああ、エフライムよ／お前を見捨てることができようか。イスラエルよ／お前を引き渡すことができようか。アダムのようにお前を見捨て／ツェボイムのようにすることができようか。わたしは激しく心を動かされ、憐みに胸を焼かれる。／わたしはもはや怒りに燃えることなく／エフライムを再び滅ぼすことはしない。わたしは神であり、人間ではない。お前たちのうちにあつて聖なる者。怒りをもって臨みはしない。」

神様が自問自答して、やっぱり怒って滅ぼすのは止めますと。こういうのは、神様ですかね。神様、一旦こうと言ったらそれ以外のことはあり得ないわけなのに、こうすると思ったけど、やっぱりそういうわけにはいかないなど、なんか心が揺れ動いているような、そういうものは神と言うのかな。こっちが考える神というのが間違っているのかな。神様は我々を見て、激しくそれではいかんよと言うんだけど、また反面そう言ったら身も蓋もないので、こうしなさい、ああしなさい、もう一回やらしてあげる。もう耐えがたきを耐え、忍び難きを忍んでおられるのか。よくわかりませんが。

そして、ここで、日本人の神学者で世界的にも有名になったんですけども、北森嘉蔵という方がいらっしゃいますね。彼はこないだの戦争、アジア・太平洋戦争の頃、あの時に繰り返し聖書を読み、旧約聖書を読んで発見したんですね。このエレミヤの言葉を。

「エフライムはわたしのかけがえのない息子／喜びを与えてくれる子ではないか。彼を退けるたびに／わたしは更に、彼を深く心に留める。彼のゆえに、胸は高鳴り／わたしは彼を憐れまずにはいられないと／主は言われる。」

今のこの新共同訳というのは、あまりいい訳ではないんですね。それで北森さんが引用している昔の文語訳のほうは、格調高いんですけどね。

「我、彼に向かいて語るごとに、彼を念わざるを得ず。是をもて、わが腸、彼のために痛む、我必ず彼を恤むべし。」

こういう風に訳されているそうで、神様は心を痛めている。そこから“神の痛み of 神学”ということが出てきたんですね。神様が悲しんだり、苦しんだりするというのは、神様だったら苦しみも悲しみもなく、苦しんだり悲しんだりするのは不完全な存在だからではないだろうかというのがギリシャ哲学の考えなんですけれども。神様も悲しむんですよ、苦しむんですよ。

わたしたちのカトリック教会の信仰でも、6月にイエスのみ心の祭日というのがありましたが、「聖心」、み心ですね。み心の信心が盛んになりました。み心とはイエスの心臓です。わたしたちの罪のために傷つき、そして苦しむイエズスの愛を示しています。

イエスは人間なので、十字架の上で苦しまれたのだから、苦しむということは知ってい

るんだけど、さらにイエスの父も心を痛めているんだという神の痛みを愛を告げています。

他方ですね、人類の悲惨な体験。第一次世界大戦、第二次世界大戦、その他の不幸な出来事。特に第二次世界大戦のアウシュビッツの大虐殺とかがあって、全く不条理な大量殺人。そういう出来事があることを体験する。また、あちこちでさらにカンボジアでもポルポト政権、大量に人を虐殺したわけですよ。スターリンだって、毛沢東だって、たくさんね。一人二人殺したら、普通の殺人罪だけど、何百万も殺せば、歴史上の特別な存在で。そういう人の存在を神はどうして許すのかという、当然の疑問が出るわけでありまして。それで神はすべてのものの原因であるという考え、悪いことが起こっても、それは神様が引き起こしてるのか、ということは理論的にはあり得ない、おかしい。そこで人間が悪いんだということになる。そういうことをやるのは人間であって。神ではないと。でも、その人間を造ったのは神様ではないですかね。どこまでいっても、堂々巡りなんですけれども、第二原因という考えがあって、人間がある範囲のことですけれども、自分で選択し、自分で決断し、自分で行動を決定することができる。

ある小さな範囲ですけれどもね。今日、皆さんここへいらっしやった。来ないと具合が悪いから来たのではなくて、来たいから来たんだと思うんですけれども。多少、義理なのかもしれないけれども、とにかく選択しているわけですね。わたしが言うのも変ですけれども、これは良いことを選択しているわけで、悪いことだって、人間、選択するわけですね。それは神様がこうしろって言われたからしたんだって、神様のせいにするわけにもいかないわけです。その悪いことが大規模に起こるのが戦争とか、虐殺ということなんですけれども。

次第に神の存在についての疑問が深まって、神は死んだという「神の死の神学」なんていうのも出てきたりはしたわけなんです。でも、神は存在する、神はしかし、人間の悪にも関わらず、ご自分の創造を完成することができるというのが信仰ですね。終末論という難しい分野になるんでしょうか。

ローマ書の 8 章というところにあるんですけれども、人間を含めた被造物もある意味でまだ解放されていない。我々はもちろん不完全な、間違った、罪を犯したりする存在ですけれども、この世に存在する被造物も滅びへの隷属という難しい言葉があって、被造物も贖われなければならない。まだ贖われていないんだというように、パウロは考えているようなんです。

この宇宙の完成という考えなんです。ということは、全然完成してないわけなんです。環境破壊。だから、教皇様は「ラウダート・シ」という回勅を出して、アシジのフランシスコの太陽の賛歌を引用した回勅ですけれども、人間という環境破壊の弊害を説いておられますけれども、そういう中で、神様のみこころに合うこの地球。わたしたちが住む共通の家である地球を、神様の考えられる状態に戻す努力をしようということを考えて、



おっしゃっているのかもしれないということを言っていると思います。

まったく前後の関係のない話、ある意味無茶苦茶な話で申し訳ないのですが、もう一つ最後に一言言いたいのは、今年 2017 年という年はマルティン・ルターという人が宗教改革を始めて、ちょうど 500 年なんですね。500 年前、大変な騒ぎになって、カトリック教会はこの異端者を破門するという処置に出たんですけども、第二バチカン公会議の頃から他のキリスト教徒との対話が大切だということを教皇様がおっしゃって、対話を重ねてきた結果、よく聞いてみると、そんなに喧嘩別れするほどの大きな違いはないということがわかったんですね。話はよく聞いてみるものなので、もう頭からこの異端者めとか言って、それから向こうも墮落したカトリック教会はダメだとか、こうなったのだけれども、ルーテルは決して教会を割って、新しい宗派を作るつもりはなかった。結果的にそうってしまった。ルターという人は、非常に真面目な修道者。アウグスチノ会という会の修道者で、懸命に祈り、苦行し、そして聖書の勉強をした。特に詩編の勉強をして、詩編の講義をした。そして彼の悩みはですね、自分の罪ということだったんですね。どんなに努力しても、自分の罪が赦されているという確信が得られない。どんなに頑張っても、様々な悪い思いというか、人間としての欲望を絶滅されることができない。それはそうなんですよ。誰でもその欲望をいかに制御するかということが、人間の責任であって、その欲望自体は罪ではないと、我々は教えてるんですけども、ルターにとってはどんなに頑張っても、自分が神に義とされる、正しい清らかな信仰深い人間であるという風に、自分を受け取ることができず、大変悩んだ。ある時、詩編の 31 : 2 というところに来た。

「あなたの義によってわたしを解放してください。」

という言葉だったそうです。これはギリシャ語がラテン語に訳されて、ヴルガータというんですけども、それを直訳すると日本語でこうなる。「あなたの義によってわたしを解放してください。」義という言葉は、またわからないんですよ、これがね。こういうのがあるから、日本の宣教は難しいんだよね。義というのを使わないで、義に義理立てしないで。神様は正しい方なので、正しくないものを排除する、罰する神なんですね。わたしたちは完全に正しくあり得ない。いくら頑張っても、正しくあり得ない。ダビデなんかもちろんそうだったんだけど、ダビデは自分が正しく良くないことをしたと認めて、赦してください、わたしをもう一回清い者に造り直してくださいと願った、その祈りなんですね。そこで結論を先に言うと、この“義”というヘブライ語の言葉は、処罰する、正義の基準という意味よりも、人を贖い、救うという神の恵みという意味の言葉だと言うんだそうです。新共同訳では、

「主よ、御もとに身を寄せます。とこしえに恥に落とすことなく／恵みの御業によってわたしを助けてください。」

ずいぶん意識してるんですね。“恵みの御業”と訳している。そしてルターはさらに、“あなたの義によって”、あなたの“義”とはつまりキリストのことだと。つまり詩編はキリス

トが現れる何百年も前に、すでにキリストのことを言っているんだと。そこまで読み込んでいますかね。だから、キリストがわたしたちの代わりに、わたしたちの救い＝義になってくださる。わたしたちがどんなに人間の力で頑張っても、完全に正しく清らかな存在になれない。でも、そのキリストに免じて、イエス・キリストがわたしたちの罪の結果を引き受けて、そういう解釈はわかりにくいかもしれないが、わたしたちを正しいものにしてくださる。このイエス・キリストへの信仰への「義認」。この「義認」という言葉はね、使いたくないですね。説明してもね。イエス・キリストのおかげで、わたしたちは神様がわたしたちに目をつむってくれるというか、イエス・キリストに免じてというか、そういうふうに言っているのか、ちょっと迷うところですけども。どうしてイエス・キリストは救い主なんですかと言われた時に、どう説明しますか。それは理屈じゃないんだよと、そう信じるんだよと言ったら、それで終わりですけども。どうもキリスト教というのは、説明しにくいわけなので。でも一番説得力があるのは、とにかくわたしはこれで救われましたと。体験です。確信のある体験。体験がなくて色んな難しい言葉を並べても、相手は忙しいんだから、まったく聞く耳を・・・と言って終わりになっちゃうんですから。だから、皆さん、あると思うんですよ。わたしはこうこうこういうことがあって、わたしは救われました。あるいは救われると希望していますと。それが大事ではないかと思うわけでございます。まとまりませんが、なにか参考にしていただけたらと思います。ありがとうございました。